SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

スーパーシチズン　超級大国民
（超級大國民 Super Citizen Ko）

1995 年／台湾映画
配給：オリオフィルムズ／120 分

2018（平成 30）年 7 月 14 日鑑賞　｜　シネ・ヌーヴォ

Data
監督：萬仁（ワン・レン）
出演：林揚（リン・ヤン）／蘇明明（スー・ミンミン）／柯一正（コー・イーチェン）／陳秋燕（チェン・チウイエン）／邢峰（シン・フォン）

みどころ

台湾のホウ・シャオシェン（候孝賢）監督の最高傑作『悲情城市』（89 年）は、１９４７年の「二・二八事件」がテーマだった。その後、１９４９年に布告された台湾の戒厳令は、何と１９８７年に解除されるまで３８年間も続いたから、その間の「白色テロ」はすごいもの。

韓国では『弁護人』（13 年）が１９８１年の「釜林（プリム）事件」を描いたが、日本の「治安維持法」と同じような韓国の「国家保安法」違反で学生たちが検挙されたのは、“読書会”への参加だ。本作の主人公は若き日に参加した“読書会”によって無期懲役とされ、さらに逃走した友人の名前をゲロしたことによってその友人は死刑判決を受けることに・・・。

本作のテーマは主人公の贖罪。そのため歴史性やドラマ性に乏しく、暗く、うっとうしいシーンの連続になるが、「スーパーシチズン」と題されたそんな本作が、あなたの心に訴えかけるものは・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■台湾のワン・レン（萬仁）監督の名前をはじめて認識！■□■

台湾では、『悲情城市』（89 年）（『シネマ 17』350 頁）のホウ・シャオシェン（侯孝賢）監督や、『牯嶺街少年殺人事件』（91 年）（『シネマ 40』58 頁）のエドワード・ヤン（楊德昌）監督、さらに『郊遊　ピクニック』（13 年）（『シネマ 34』306 頁）のツァイ・ミンリャン（蔡明亮）監督や、『残酷ドラゴン　血斗竜門の宿』（67 年）（『シネマ 39』未掲載）、『俠女』（71 年）（『シネマ 39』未掲載）のキン・フー（胡金銓）監督が有名で、私もよく知っていた。しかし、２０１８年７月１４日から８月１７日までシネ・ヌーヴォで開催されている「台

湾巨匠傑作選2018」で、私ははじめてワン・レン監督を認識することに。

本作はタイトルだけ見ても何の映画かわからないが、ワン・レン監督は他にも『超級市民』と『超級公民』を作っており、本作と合わせて「シチズン三部作」と呼ばれているらしい。「シチズン」とはもちろん「市民」だが、フランスのような「市民革命」に縁のない台湾で、なぜシチズン（市民）をタイトルに？それについては「台湾巨匠傑作選2018」のパンフレットでワン・レン監督自身が詳しく解説しているので、是非それを読んでもらいたい。

■□■戒厳令とは？日本では？中国では？■□■

シネ・ヌーヴォでは、「台湾巨匠傑作選 2018」と並行して、２０１８年7月２１日から９月１４日「ＡＴＧ大全集」を開催しているが、そこでは吉田喜重監督の『戒厳令』（73年）も上映される。これは１９３６年（昭和１１年）に起きた「二・二六事件」をテーマとした映画だが、その時は、日本でも戒厳令が布告されたの？

ウィキペディアによれば、「戒厳」とは、「戦時や自然災害、暴動等の緊急事態において兵力をもって国内外の一地域あるいは全国を警備する場合に、国民の権利を保障した憲法・法律の一部の効力を停止し、行政権・司法権の一部ないし全部を軍部の指揮下に移行することをいう。」と定義されている。これは軍事法規のひとつであり、戒厳について規定した法令を戒厳令という。本来はテロなどによる治安悪化や過激な暴動を中止させるために発令が行われるもので、「非常事態宣言」との定義の違いは、戒厳令とは国の立法・司法・行政の一部または全部を軍に移管させることである。また、戒厳令の淵源は、フランス革命中の１９７１年にフランスで施行された「戦場及び防塞の維持区分、防御工事等の警察に関する法律」にあるそうだ。

日本では、１８８２年の太政官布告第３６号「戒厳令」で戒厳の対応を規定し、その後１８８９年に公布された大日本帝国憲法第１４条で「天皇は戒厳を宣告す。戦後の要件及効力は法律を以て之を定む」とし、戒厳令は憲法の体系に組み込まれた。なお、戒厳令とは別に、緊急勅令に基づくいわゆる「行政戒厳」がある。しかして「二・二六事件」時に取られた行政措置を「戒厳」ということもあるが、これは正しい表現ではなく、正確には行政戒厳だとされている。

また、中国では１９８９年の天安門事件（六四事件）の際に戒厳令が布告されたし、韓国では過去何度も戒厳令が布告されている。しかして、台湾でも蒋介石政権下の１９４９年に戒厳令が布告されたが、それはなぜ？そして、それはいつまで、何年間続いたの？

■□■台湾の戒厳令はいつからいつまで？白色テロとは？■□■

『悲情城市』は、１９４７年に起きた「二・二八事件」を、林家の４人兄弟の悲劇と絡ませて描いた、ホウ・シャオシェン監督の最高傑作。「二・二八事件」は、中国本土での「国

共内戦」に敗れて台湾に渡った蒋介石率いる国民党政権が、台湾住民（本省人＝内省人）の抗議行動を武力弾圧した事件で、犠牲者は推定１万８０００人～２万８０００人と言われている。

同作では、「二・二八事件」を中心に内省人である林家の４人兄弟が、国民党による反外省人活動に対する弾圧によって次々と逮捕されていく悲劇が描かれていたが、「二・二八事件」以降も続いた内省人の抵抗を抑え込むため、１９４９年5月１９日、蒋介石は戒厳令を布告した。そして、この戒厳令は、蒋介石の息子である蒋経国総統が、五・一九緑色運動の高まりを受けて１９８７年7月１５日に解除するまで、３８年間もの長期にわたって施行され続けた。ちなみに、ウィキペディアによると、これは２０世紀を通じて世界最長の戒厳令であるとされている（なお、ワン・レン監督はパンフレットの中の「ロングインタビュー」の中で「戒厳令は１９５０年から１９８７年までの３８年間、発令されていました。世界で２番目に長いものです。皆さん、１番長く戒厳令が敷かれていた国はどこかご存じですか？シリアです。台湾より更に１０年長いものです。」と話しているが、シリアのそれは戒厳令ではなく内乱に伴う非常事態宣言だから、ワン・レン監督の誤解だと思われる）。また、台湾は２０１６年5月以降、国民党の馬英九政権に代わって蔡英文率いる民進党が政権を握っているが、その蔡英文政権下で２０１７年7月１５日に戒厳令解除後３０年を迎えたことを契機として、死者数などについて真相究明に取り組む姿勢を強く打ち出している。

他方、“白色テロ”とはパンフレットによると次のとおりだ。

> 白色テロとは…台湾（中華民国）において白色テロ（中国語:白色恐怖）とは、1947年二・二八事件以降の戒厳令下における国民党政府による反体制派に対する政治的弾圧のこと。1987年に戒厳令が解除されるまで続いた。「白色」とはフランス王国の王権の象徴であった白百合に由来しており、フランスでは白色は王権または王党派を意味する色であった。転じて、フランス以外でも治世者全般をさす色とされ、「白色テロ」は為政者の反体制側に対する弾圧を意味するようになった。

■□■“読書会”はヤバイ！それは台湾も日本も韓国も共通？■□■

どの国を問わず、学生は勉学が本分だから、大学の中では勉強すべし。そう考えると、読書会に参加するのはいいこと。誰でもそう思うが、私の学生時代を考えても“読書会”の教材には得てして思想的傾向が強い本が選ばれるから、“読書会”（勉強会）に名を借りた、組織による体のいいオルグ活動の場になることが多い。

しかして、日本では黒澤明監督の『わが青春に悔なし』（46 年）で、韓国では『弁護人』（13 年）（『シネマ 39』75 頁）で描かれていたように、“読書会”は当局の目から見れば、反体制派の不穏な組織的抵抗活動と見られる傾向がある。そのため、前者では“京大事件”の発生後、自由主義者の八木原教授は罷免され、前途有望な教え子だった野毛も治安維持法違反で逮捕され、獄死してしまった。また、後者ではジヌは、読書会への参加が国会保

安法違反とされ、裁判で懲役３年の刑が言い渡されてしまったが、さて台湾では？

本作は、老人ホームから自宅に戻ってきたコー・ゲーシン（許毅生）（リン・ヤン）が主人公として登場するが、当然彼にも青春時代があったはず。しかし、運悪く彼の青春時代は戒厳令が布告されている“白色テロ”の時代だったから、１９５０年代のある日、コーが参加していた読書会の現場に官憲が踏み込み、コーを含む参加者は一斉検挙されてしまうことに。その混乱の中、友人のタン・チンイッ（陳政一）（コー・イーチェン）だけは1人逃走したが、逮捕後の厳しい取調べが続く中、遂にコーはタンの名前をゲロしてしまうことに。その結果、コーは無期懲役だったが、逮捕された後、自ら「首謀者」と名乗って全体の責任を取ったタンには死刑判決が下されることに。

ええ！読書会に参加しただけで死刑判決に！どうやら、読書会がヤバイのは台湾も日本も韓国も共通らしい・・・。

■□■台湾の死刑執行は？その日中比較は？■□■

去る７月６日には、オウム真理教の元教祖・麻原彰晃ほか６名の死刑が執行されたが、それは２００６年の死刑判決確定から１２年後のことだ。しかし、本作に見るタンの死刑の執行は死刑判決からすぐのことらしい。また、日本では死刑の執行は絞首刑だが、さて中国のそれは、また、台湾のそれは？

中国映画『再生の朝に　―ある裁判官の選択―（透析／Judge)』(09 年)（『シネマ 34』345 頁）では、車２台の窃盗で死刑判決という実態にもビックリさせられたが、「死刑執行は、判決確定から１０日以内」と定められている中国で、河原での銃殺という形で死刑が執行される姿にもビックリさせられた。それと同じように、本作でも、冒頭タンら３人の死刑囚がトラックに乗せられて野原に運ばれ、そこで３人揃ってピストルで射殺されるという形での死刑執行の姿が登場するので、それに注目！

他方、ワン・レン監督は「ロングインタビュー」の中で「死刑になった人は、その家族が給料の３か月分のお金を支払わないと遺体を引き取ることができませんでした。引き取り手のない遺体は、病院の解剖用に提供され、その後名もないまま雑多に埋葬されていました。この映画にぐちゃぐちゃになった墓標が出てきますが、そういう所に埋葬されたのです。」と語っている。日本では、麻原彰晃の遺体（遺骨）でさえ、誰に引き渡すべきかについて本人（麻原彰晃）の意向が尊重されるから、日本の民主度（？）はすごい。

もっとも、その意向に沿って麻原彰晃の遺骨は四女に渡されることになり、四女も、代理人たる滝本太郎弁護士のブログを通じて「指名を受けた私自身が大変驚きました。しかし、それは実父の最後のメッセージなのではないかと受け入れることにします」と表明したが、同時に、「遺骨を手元に置くことは身の危険を感じる」として、海への散骨を希望したそうだ。四女への遺骨の引き渡しに異議を唱えたのは、麻原彰晃の妻と次女、三女、長男、次男だが、最も懸念されるのは、遺骨が信仰強化に利用されること。「ひかりの輪」代

表の上祐史浩は「公共の安全から考えれば、理想は四女の代理人が主張する海への散骨だと思います」と語っているそうだが、私も同意見だ。麻原彰晃の遺骨が“火種”となって、新たなオウム残党によるテロ事件に繋がることがないよう祈るばかりだ。

■□■徹底的にコーの贖罪の視点から！■□■

パンフレットにあるワン・レン監督の「ロングインタビュー」によれば、当初本作の構想には３つのバージョンがあったが、結局コーの贖罪に焦点を当てる第３のバージョンがベストとして選択されたらしい。

第１のバージョンは、コーの一人娘の夫を主人公とし、例えば国会議員や黒社会、ブラックマネー等をテーマにするもの。そこではコーは脇役の存在になる。第２のバージョンは、当時の台湾の白色テロや家族の問題を主人公の老人に表現してもらうもの。つまり、実際に自分が貶められて投獄され、労役所から出た後、自分を貶めた人を探し出して見つけ、その人を許すバージョン。これは、投獄されて酷い目にあった主人公が、心の葛藤の末、貶めた人を見つけて許す、という偉大な人の物語になる。

しかし、ワン・レン監督が本当に描きたいものはそうではなく、投獄された若い人たちが、社会に対して持っている理想と現実の間でいろいろ揺れ動いていることをテーマとする第３のバージョンだったらしい。本作には、コーが逮捕されている中で行われる、自宅の家宅捜索のシーンに、怯えた妻、よしえ（王淑惠）（チェン・チウイエン）とまだ小学生と思われる一人娘の姿が登場するが、減刑されて刑務所から出所してくる老人のコーを迎えたのは、あの時小学生だった娘のコー・スーチン（許秀琴）（スー・ミンミン）だ。夫のツァイ・チャムツァイ（蔡添才）（シン・フォン）は成功して財を成している実業家らしく、その自宅の豪華さにはビックリ。ツァイもこの後政治家を目指す中、ある政争に巻き込まれて自宅が家宅捜索されることになるが、これは前述の第１のバージョンを少し取り込んだものだ。

それはともかく、本作は始めから終わりまで前述した第３バージョンつまり、コーの贖罪の視点から描かれているので、全編を通して暗く、うっとうしい場面が続いていく。日本の俳優、志村喬に似た感じのあるコーを演じるリン・ヤンは、優しく迎えてくれる娘への感謝の言葉をほとんど述べないまま、贖罪のためにあくまでＧｏｉｎｇ　ｍｙ　ｗａｙ。あくまでオレ流の余生をタンのお墓にたどり着くためにのみ使っていたが、さてその成否は？

■□■ドラマ性では圧倒的に『悲情城市』だが・・・。■□■

『弁護人』の“素材”は、１９８１年の「金林（プリム）事件」と呼ばれる国家保安法違反事件だったし、『悲情城市』のそれは「二・二八事件」だったから、両者とも歴史モノとしてのドラマ性は十分で圧倒的な迫力があった。それに比べれば、本作は読書会への参

加によって逮捕され、長い間服役した結果、老人になって出所してきた主人公コーが、友人のタンを密告したという贖罪の意識から抜け出すことができないまま、タンのお墓を探し出すことに邁進するという物語だから、何の歴史性もドラマ性もない。本作で終始一貫して描かれるのは、空洞化してしまったコーの心の中だけだ。したがって、妻のよしえが長い時間をかけて遠い孤島にあるコーの監獄まで娘の手を引いて面会に行くシーンが暗ければ、そこでコーから離婚届の用紙を渡されるシーンもトコトン暗い。その結果、よしえは自殺してしまい、娘のスーチンは親戚の家をたらい回しされることになったのだから、スーチンの苦痛は想像を絶するものがある。それなのに、刑務所を出た後コーは、「是非、父娘で一緒に暮らしましょう」というスーチンの誘いをはねつけて、勝手に老人ホームに入ることを決めたかと思うと、老人ホームを退所した後はロクな説明もしないまま、毎日１人で外を出歩くことに・・・。

有力な実業家の妻となりながら、今なおそんな父親にトコトン尽くしているスーチンの姿を見ると涙が出てきそうだが、コーはそんな娘の想いをどう考えているの？家族（娘）のそんな想いよりも、タンに対する贖罪の気持ちがそんなに大きいの？そのお墓探しが、そんなに大事なの？そこらの理解は難しいところだが、「スーパーシチズン」と題された本作で、ワン・レン監督が描きたかったのはまさにそれだ。鑑賞後も決して楽しい気持ちにはなれず、陰鬱な気分のまま劇場をあとにすることは確実だが、さあ、そんな本作に込めたワン・レン監督の思いをあなたはどう考える？

２０１８（平成３０）年7月２３日記